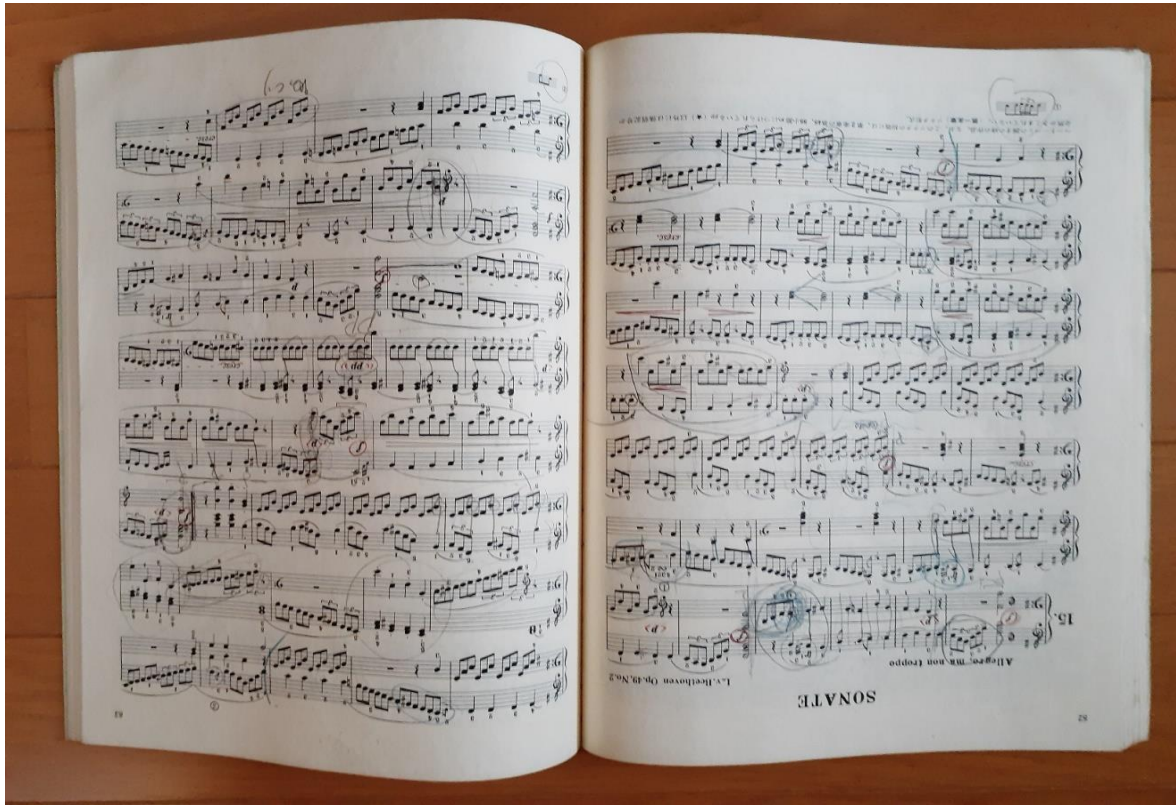


essais ころみ 2025年3月

2025年3月3日（月）

はるか昔、ピアノの発表会で弾いた曲の楽譜



転職の合間、たまたま新聞のチラシにピアノ教室の案内。ヒマにまかせて習い始め、先生が発表会参加を勧めてくれて、練習。当日会場へ行ってみてビックリ。子供たちの発表会に大人一人演奏。親御さんたちの目を丸くした表情が印象的でした。それにしても教室の先生はよく黙っていてくれました。もし子供たちのものと知っていたら、手をあげなかった。良い経験ができて感謝。せっかくだからアルバムから写真を取りだして…。発表会の日付は1984年4月29日でした。



2025年3月3日（月） 雨

昨夜から本降り、明日にかけても雨の予報。1日の土曜はよく晴れ、温かく、春本番をおもわせたが、まだ先のおたのしみ。

ー 学びはうそをつかない (2) ー

『先天と後天、学びのパノラマ』⑤

「社会の変化を先取りして感じることができる。外国人として生活する者にはそういうセンスが養われる」。友人がそう言ったとき、そんな風に考えたことがなかったので、目が開いた。それはあり得る。

コミュニケーションのとり方については、「外国人」なんだと気づくことになった、独立してから。「世間」という言葉は知っていても、概念や感覚は、自分にはまったくないことを知った。

さらに社会や時代を読むことに繋げて考えるまでには至らなかった。社会に目をむける度合が比較的高い、たぶん。でもそれは自身自身の志向性と仕事柄のなせるワザだと、漠然と考えていた。

あらためて考えてみると、たしかに腑に落ちた。ふり返ってみれば、今でいう多様性を許容する世界や場に身をおいてきた。社会は変わっても、普遍的な価値を大切にしている世界を察知して。

「外国人」という生まれもった条件が養ってくれた力はけっこうあるのではないか。社会の空気や集団の文化性をかぎ分けるような力。たぶん社会的知性の下地になっている。

過去から現在、あまり不愉快な想いをせずやってこられたのは、自分の守りたいものの究極＝自分の精神性を冒しそうなものを、ある程度回避できてきたおかげではないか。

しらず知らず学びとっていたものが仕事やプライベートの生活で生きてきた。学びそのものって目に見えにくいけど、人の営みをたどれば、水脈として道すじをつけている。

2025年3月5日（水）啓蟄 雨

今日も雨、晴れてくるのは明日になるよう。関東は都内でも雪、土曜は春めいていての急冷。寒暖の差が激しく、カラダに堪えそう。

ー 学びはうそをつかない (2) ー

『先天と後天、学びのパノラマ』⑥

外国人であることが社会的知性を養ったことは間違いないが、それだけなはずはない。他の大事な要素として、父が早く逝ったことときょうだいが多いことの2つがある、たぶん。

6人きょうだいの一番目、13才で生活環境は一変した。ただ父の薫陶はしっかり身に入り込んだ年齢であった。それらが先天的な質を刺激して、観察眼を養った気がする。

親をふくめ、大人の浅はかさ、狡猾さ、非情さをみる一方で、善良さ、誠実さ、真実さをみた。おそらく16才までのうちに、人間の〈さま〉を捉え、のちの読書でそれを確定させた、といえるかもしれない。

きょうだいが6人だったのは、たぶん、さいわいした。中井久夫先生が書いていたように、「5人以上になると、親との相互作用よりも、きょうだいどうしの相互作業が重要になってくる」。

ましてや一人になった母にすれば、全員に関わっておられない。子の人生のはやい段階から親があまり口出ししなかったのは、これは大いにさいわいしたと思う。

親との軋轢、葛藤を抱える人の多いことを仕事を通して知った。その反動をパワーにする人もいるが、親のはめた枠にとらわれてけっこう心の重しになっている人もいる。

ときどき人から、「つよい」とか、「バランスがいい」とか言ってもらおう。なぜそんな風にみえるのか。自分では、人間らしい人間といっている。自分を守るための本能がしっかり働き、対処する。

生まれ持った質そのものが、「つよい」とは思わないが、「バランスがいい」とは思う。その質からすれば、10代そこそこの環境急変が糧になり、バランス保持に磨きをかけた、といえるか。

2025年3月7日（金） 晴れ

昨夕から晴れてきた。早朝は雲が多かった。でもようやく陽がさしてきた。今日はまだ寒い。でも陽ざしは春。

ー 学びはうそをつかない (2) ー

『先天と後天、学びのパノラマ』⑦

晩年期にさしかかると誰でも現在に至る人生の運びに感慨をもつもの。個人的にも、よくぞこういう風に展開してきたなあ、きているなあと不思議におもう。

仕事でたくさんの人と出会い、込み入った話も聴くことになる。人それぞれの持って生まれたものや、環境の違い、はたまた宿命と運命の刺激合いというか、駆け引きというか、複雑すぎて、もう「幽玄さ」といいたくなる 人一生。

その人ならではの先天的なものが、後天的な状況からその人の学びかたを促し、年齢をかさねながら、その学びが指数関数的に蓄積されて、その人だけの自分史となる、物語ができる。

老いて、その自分史に「○」をつける人もいれば、「△} あるいは「×」？
となると、それは少しさみしいけど、そこで必要になるのが、「智恵」か。

2008年の2月から4月にかけて、『無の探求』（梅原猛 柳田聖山）を読んだ。禅について書かれたもの。なぜ読む気になったのか、別の本を読んでいて、その気になったのかもしれない。ただ、そう簡単に読み解ける内容でない。腑に落ちる一文を見つけただけ

やすらぎ（定）は智恵にそのすわりをゆずる

いま再読している『数学する人生』にも「智恵」はよく出てくる。ここは辞書の説明を。「（智慧）仏語。相對世界に向かう働きの智と、悟りを導く精神作用の慧。物事をありのままに把握し、直理を見極める認識力」

よくもわるくも、結果をうけとめ、それもこれも、自分で運んできた人生と自分に言い聞かせ、心を落ち着かせる。なかなかそうできるものではないけど、人間は学ぶ生きものだから、繰り返すうち、心にすわる。

「やすらぎ」=穏やかなゆったりとした気分。いつもそうありたいもの。

2025年3月10日（月） 晴れ

早朝からよく晴れている。気温も15°Cまであがる予報。1月半ばに反転した日の出時間、今朝はそれが目にみえてきた。同じ時間なのに、明るくなってきた。ああ、春。

ー 学びはうそをつかない (3) ー

『読書の真価、世界の深化』①

「学び」は、ものごとについて自分なりの答を得たことを指すのだらうと思う。でもなかなか確定にはならない。年月をかさねながらバージョンアップしていく。

学びはそもそも自分のためのものだが、人のためになって自分もいきるわけだから、もし自分より若い人から何かしら頼りにされるようになったなら、それなりによい学びをかさねてきたと胸をなでおろしていい。

そう、最近そんな心境にある。残り時間はもう少ないのだから、そろそろ自分の歩みを自己評価しても差しつかえない。とりあえずほっとしているのは、少しは大人になった、ということ。

若い頃のなんと未熟だったこと。独立する判断は本当に正解だった。よくぞ実践したと我ながら、「自分を褒めてあげたい」。人に問われ、試され、また、人に恵まれ、励まされ、学びの旅は続き。今も続けられているから。

おのずと考えさせられる。おそらく生まれつき考える質であるところに、さらに考えさせれる状況。特に事務所を開設した1995年3月からの3年は、過ぎてみれば珠玉、でも当時は混沌。

ひょっとして見当違いのことを始めたか？ そんな目線をもつ羽目になった。実際そうなら、やる意味がない。答え捜しにまず手にしたのが、本。古今東西の多様な知にあたることができる。やはり本になる。

2025年3月12日（水） 曇

昨日はだらだらと雨がふった。今日はずっと曇りのよう。気温はぐっと上がるから、歩くにはいいかもしれない。いやいや寒暖差でカラダに堪えるか。

— 学びはうそをつかない (3) —

『読書の真価、世界の深化』②

活字が好きでも、本が好きでもないけれど、自分の問いの答えを探すとすると、本が一番アクセスしやすい。通った塾のおかげで10代のうちに読書が生活の中に入っていたのはよかった、恩師に感謝。

1995年から1998年にかけて、図書館をよく利用した。当時住んでいた箕面市立図書館は休みごとに館内を〈徘徊〉した。事務所から近い大阪市立中央図書館も頻繁に利用した。

あの本に出会わなかったら、“早々にJ廃業していた…”という決定的な一冊があるし、“脳科学の世界が意外にじっくりくる…”と新しい発見をした本もある。

その〈発見〉から間もないときに、知人の紹介で仕事することになった先方から、「それなら…」と、聞いたことのない人の一冊を教えてもらった。その本に感じ入り、会ったときにお礼をいうと、別な一冊を勧めてくれた。こう展開すると、あとは自分で次を求め

ストライク

自分なりの偶然の発見に端を発し、また偶然にも、新しい出会いの人に話が通じ、自分の知の世界が広がり、深まる。タイトルの「世界」は自分と自分を取りまく世界、という意味。

早々と自分の道を諦めずに済んだこと、人との出会いとその後の交流を深めさせたこと。そこに本があった。そういえる。

2025年3月14日（金） 曇から晴

いまスギ花粉がピークらしい。昨日の昼、ちょっと買い物に出ただけで夕方目の周りが痒くなった、くしゃみも出た。この程度で済むよう、気をつけよう。

ー 学びはうそをつかない (3) ー

『読書の真価、世界の深化』③

「エビデンス」が無いと動けない人は遅れをとる。先日読書効果に関するセミナーをオンラインで視聴して、そう感じた。

身近な世界でいえば、社会起業家。研究者や行政などが、「コミュニティビジネス」、「ソーシャルビジネス」、「社会起業家」と名づけるずっと前に、社会の流れや課題を読み、動いた人がいる。

読書の効果は、大抵の人は人に教えられなくても知っている。ただ、実際に読書の習慣がつかないと実感は伴わない。

その実感もあまり自分では持てない。ある場面や状況に接し、人と自分の感じ方や考え方の違いを意識した時に、その差は何だろうと感じ、あれこれの要素の中に読書が一つの候補として上がるか。

ちなみに読書習慣には、言葉の習得、知能の発育、メンタルバランス、学力向上に効果があると科学的に証明されたいらしい。

また、効果をうまく引き出すのは、毎日短時間でも読むこと、ほんの少しハードルのある本を読むこと、そして多様な分野の本を読むのがよいとのこと。

個人的に読書の効果に意識がいったのは、今から10年ほど前だった。それまでも漠然とは感じてはいたが、しっかり注目することになったのは仕事を通してだった。

同じように助言しても、ピンとくる人とそうでない人がいる。ピンとくる人は多くと語らなくてもわかるし、そうでない人は言葉を尽くしても空回り。この差は何だろうと、おのずと考えることになる。

それ以外にも仕事ではさまざまな場面で自分の視点や観点、意見や感想話す、表すことになる。しだいに他者との違いを思い知らされる。そんなことが重なり、2015年あたりで読書に注目するに至った。

それから10年がすぎ、さらに最近は読書に畏れを抱く。10年前の認識はまだ甘かった。そんな気がしている。

2025年3月17日（月） 曇

朝一番は陽もさしたが、全体としては曇りの予報。昨夜から風がつよく、冷たい。春分の日以降ぐっと上がるらしい。暑さ寒さも彼岸まで。

ー 学びはうそをつかない (3) ー

『読書の真価、世界の深化』④

大学予備校講師の人から聞いたことが印象に残っている。「医学部を目指す学生でも最近は、抽象度の高い問題は扱えないんですよ」。例えば、医師にとって一番大事なことは何だとあなたは考えますか？と問われてると、固まってしまう。

仕事上で相談にのっている相手がこちらの話にピンとくる、こないの差も、その〈抽象度の高い〉問題、課題、話題に反応できるかできないかの違いかもしれない。

他者と同じ専門性をもっていて、他の多くの人と同じようなことをしてはその中に埋没する。同じであっても、自分なりの問題意識や視点、その先に事業テーマを見出し、動き出して、自分の世界が開く。

先達の説によれば、人間は生まれつき、精神的なことになじむ人、精神的であるけど現実寄りになじむ人、現実的で平均的なことになじむ人、現実的・特技的なことになじむ人、の4つの型があるという。

「パーソナリティー」も「読書好き」も、50%は〈生まれつき〉の影響があるというから、やはり抽象度の高いテーマに素養のある人とそうでない人はいるはず。あとは生活環境の中での訓練・鍛錬しだい。

「大人になると小説は読めなくなる」。恩師のところの読書会で恩師が言った。まだ二十歳そこそこだったが、何となく頷けた。小説というのはたぶん純文学のものをさしている。年を重ねるうちに、『事実小説より奇なり』がわかるからではないか。

個人的にも小説を読んだのは20代までだった。30代に入る前あたりから、若年期の一番花のある時期でもあり、他のことに気をとられ、本を読むこと自体なくなった、ふり返れば。

ふたたび本を手にしたのは独立してから。ここからは〈抽象度の高い〉本を読むことになった。自分ならではの業のはずだけど、社会の中の意味、意義を問われ、それを解こうと探して、出会った。

本は膨大にあるから、遅かれ早かれ、必ず見つかる。今もそれら本にいろいろと教えられているが、数年前から、若年期の小説読みに注目するようになった。

2025年3月19日（水） 曇

昨夕から雨がふり、風もつよかった。今朝は一段を寒い。早朝は陽もさしていたが、すぐに雲が多くなり、また雨がパラついた。季節の変り目にしても、気象が荒い。明日は「春分」。

ー 学びはうそをつかない (3) ー

『読書の真価、世界の深化』⑤

数年前に出た本、『読書する人だけがたどり着ける場所』の広告をみた時、言わんとすることが想像できた。うまく表現したタイトルだと感じた。目次をチェックすると、認識力を高める、思考を深める、時代を超えた普遍性をそなえる、といったことが書かれているよう。

「ハウ・ツーは20代まで、30代になると原理原則や理論をおさえないと」。社会教育にかかわる人がそう言っていた。そこで思い出すのが、多くの企業の顧問弁護士だった「中坊公平」の言葉。

長年の経験から経営者には大きくわけて2つのタイプがあるという。「着手先行型」と「理念先行型。流行りや他の成功例をとりいれようとするタイプと、自分の問題意識や信じることに挑戦しようとするタイプ。

流行りや他の成功を模倣するのは、短期的には成果を得るかもしれないが、『歴史の批判には絶えられない』（中坊公平）。このひと言が利いていた。かつては是だったものも時間が経ち否ということもあり得る。

仕事で相談にのる人の多くは、自分ならではの問題意識から事業テーマを見出す人。ただ、具体的な事業展開になると、「構想」ができにくい人がある。体系的にとらえ、長期的視点をもって、事業の進む未来を想像する。思考がその方向へ向きにくい。

四次元的な発想ができにくいと言えるかもしれない。だからか、目先のことにとられやすい。事業の全体像と展開方法が固まる前から、チラシの作り方、助成金の種類を知ろうとする。

「これからどんなビジネスがいけそうですか？」という人も一人だけいた。40代の人だったから、少し驚いた。話を聴くうちにそのワケはわかった。本当は芸術系に進みたかったのに、親に大反対され、意にそわない進路になった。それが尾をひいている。自分探しが続いているよう。

実業家で詩人、小説家でもあった「堤清二」が日経新聞のインタビューにこたえて、「読書とは本禦以外の本を読むこと」と語っていた。これは、ほんと、そうだと思う。経営者が経営に関する本を、自分の専門分野に関する本を読むのは、仕事の範疇。

自分のやりたいことの未来を構想する、そもそも自分のやりたいことは何かと自問する、逆境に遭ってはどうか生きるか光をもとめる、など等の人々の営みが時代を超えて、小説や詩、絵本などに、膨大に展開されている。若いうちから親しんでおくにこしたことはない。

2025年3月

今年度のアジア映画祭が開催中、旧知の人からチケットが余ったからとお誘いを受け、3本観賞。『その人たちに会う旅路』、『6時間後に君は死ぬ』、『君と僕の5分』。



終わり方が?のままだった『その人たちに会う旅路』。主演の女性俳優さんは、知る人ぞ知る、なのか、記念にこのポスターと一緒に写真を撮る人がけっこういた。



日本の原作をもとにした『6時間後に君は死ぬ』。韓国社会の裏を見せましたが、ラストはほっこりする作品でした。



観終わって、「よかったね」と旧知を言い合いました。切ないけど、主人公のなんというか、ある種の諦観というか、未来を閉ざさず、開いている感じが清涼感を醸し出していました。





2025年3月21日（金） 曇から晴

朝のうちは曇く、午後からよく晴れるよう。昨日の春分はよく晴れた。気温は低めは室内にいと少しひんやり。今日は日中17°Cまで上がる予報。寒いところからの急な気温上昇は「だるさ」に要注意。

— 学びはうそをつかない (3) —

『読書の真価、世界の深化』⑥

他者・他社に向けてとる自分の行動の少し先の展開を読む。なぜそれが出来ないのか。小さな問題意識をもったのは5, 6年前のことだった。当の本人がやることだから想像できて当然と、無意識に決めつけていたのかもしれない。

なぜできないのか…、自分はできる方…、その差は何か…。考えるうちに思いあたったのが読書だった。なかでも小説。登場する様々な人間とその模様、社会環境や生活状況、それらが織りなす物語。多読していなくても、「構想力」や「想像力」に貢献しているのではないか。

それ以来、仕事の現場で相手の相談者が「本をけっこう読んでいます」という話が出ると、本の種類をたずねるようになった。少なくないのが俗にいう「自己啓発系」、日本でいう「スピリチュアル系」に傾倒している人も案外多い。

恩師のところの読書会で10代のうちに読書の手習いをできたのは仕合せだった。「堀田善衛」に出会ったことで人間と人間社会のあり様をかいま知った。少なからず自分の精神の糧になったのは間違いない。

いつかの読書会で次に読む本を恩師が皆に伝えた。大衆小説作家といわれた「黒岩重吾」の作品だった。すると門下生の一人が、「そんなもの…」と見下したようにぼろっと言った。すかさず、「君、それはダメだ！」と強い口調で恩師が諭した。

『数学する人生』の今朝読んだ箇所に、数学の研究は「大脳前頭葉という知性のキャンバスへ無色・無形の絵を描いて行くようなもの」を書いてあった。20代までの小説読みは、そのキャンバスに絵を描いていく術を身につけさせるといえないか、「構想」や「想像」といった。

構想して想像できれば、次のアプローチができる。未来を自分で少しずつ拓いていく。その過程は人との交わりでもある。自分の世界が広がり、深まることになる。読書の波及は計り知れない。読書、おそれいりますの感

2025年3月24日（月） 曇

今日は一日曇空、明日あさっては晴れるらしい。週末はまた気温がぐっとさがる予報。昨日おとといの陽ざしは暑いほどだった。半袖すがたで自転車を走らせる女性をみた。日焼けが心配になった。

— 学びはうそをつかない （4） —

『自分を教える』 ①

はじめて『モンテーニュ』を読んだのは2001年だった。『エッセー』のエッセンスが小気味よく紹介されたい。その中に次の一文があった。

『ここに書いたものはわたしの学説ではなく、わたしの研究であり、他人を教えるためのものではなく、わたしを教えるためのものだ』。

事務所開設当初からリーズレターを編集して発信していた。Webサイトを開設してからは、仕事で知り合った人の勧めで、トップページに短文を書くようになった。

「なんで、そういうことしてるの?」。久しぶりに会った友人にそう言われたことがある。ワケを知りたいというより、ワケがわからないという感じだった。

そうか、わからないんだとわかったから、あえて言葉を返すことなく、あいまいに答えてやりすごした。『モンターニュ』を読んでいたら、先の一文を借りて、答えたかもしれない。

日記の習慣はなかったけど、自問自答のために書くことは10代の頃からしていた。その頃のノートは残してある。その中には読書の記録もある。

届いたリーズレターをみて読んで、追って友人の一人が、「リーさんは〈話せる〉人だとは思っていたけど、〈書ける〉人だとは思わなかった」と言った。

「書ける人…? いや、それは違う」と返した。自分の考えていることを話すのと同じで、書いているだけ。話して、書いて、精神的な習練をしているようなもので、「書くのが好き」ということでも全くない。

だから「モンターニュ」の「わたしを教えるため」というのが、簡単な言葉でうまく表現していると感じた。そして、「わたしを教えるため」の積み重ねがいずれ、「他人を教えるためのもの」になる。たぶん。

『他人にもっとも役に立つようにするためには、現在の自分にとってもっとも役に立つようなことをすればいい』（ヒュー・ブレイザー）とは、よくいったものだと、これまた感心する。

2025年3月26日（水） 晴れ

昨日同様、晴れてはいるけど、空全体が白っぽい。昨日から黄砂が飛来。花粉と重なり、夕方に目のまわりが痛痒くなった。また急な気温上昇で、夜になると何となくカラダがだるい。気をつけよう。

ー 学びはうそをつかない （4） ー

『自分を教える』 ②

『エッセー』が象徴するように、自分を教える最良の方法は〈まとめる〉ではないか。書いてまとめる。個人的な経験からも実感している。

〈まとめる〉の最初は冊子『哲樂の中庭』だった。発行は2001年7月だが、その気になったのはもっと前で、まとめるのに時間がかかる。

独立して10年、事務所開設から5年となると、自分を問う場面は数知れず、初期の大切な気づきをまとめたことで、学びの腰がすわった。過去に感謝し、新しい出会いに未来を展望し得た。

2つ目の『自業のすすめ』は「生みの苦しみ」は半端でなかった。サイトにアップしたのは2016年4月だが、一冊目とは比較にならないほど、時間を費やした。

2002年以降2010年までの9年は、仕事でさまざまな機会を得た時期だった。おかげで〈自分ならではの〉を知る機会にもなった。それやこれや、書きまとめたことはたくさんあった。

でも、よくよくみると、どれも一般化するのはむずかしいものばかり。それに自業は日々刷新されている。いまの時点で書ききれても、まだ先がある。そこで書いてきたほとんどを削除し、シンプルにまとめた。

しかしこの孤軍奮闘が功を奏した。仕事上の出会いに新しく決定的な認識を得た。「わたしは見つけてもらったんだ…」。ある瞬間にうかんだこの発想に、小さな衝撃をうけた。これが降りてきてくれて 天に感謝。

2冊をアップした時から3冊目が〈総まとめ〉になる考えていた。そうしようと決めた。2021年秋に手を付け始め、2022年春に書き始めたが、その後は中断したまま。

ただ昨年秋からここに書いた『どのようなPAか』、それに続く今の『学びはうそをつかない』は、3冊目の下地になるのではと思いつながりながら書いている。さて、本腰をいれて書きまとめるのはいつになるか。

ともあれ、〈まとめる〉は大事なアプローチ。自分にとっては大きな発見、学びになり、まとめたものは他者に伝える媒体となる。先日あるNPOに助言することがあり、3年後に設立20周年を迎えるというから 記念誌の編集を勧めた。

団体の歩みに加え、事業テーマのもつ未来社会における意義についてまとめていく。編集作業のプロセス自体が自分たちの存在価値の見直しになり、ビジョンを共有化することにもなる。

〈まとめる〉には時間と労力を費やすが、それだけの値打ちあり。

2025年3月28日（金） 雨・曇

気温の高いまま雨になり、今朝そとへ出たとき、少しムシっとした。ただこれから下がっていき、またひんやりする。着るものにこまる。

— 学びはうそをつかない (4) —

『自分を教える』 ③

「人を動かす」前に自分を動かないとだめだろうし、人を教える前に自分を教えないといけない。はっきりとそう意識していたわけではないけど、そうあるべきだという感じはどこかにあった。

その模範を十代のうちに観ていたからかもしれない。寺子屋のような学習塾で教えられたことは、テキストの勉強だけではなかった。よい大人の手本をみせてみらった気がする。

塾では、家庭の事情によっては無償で子どもを受け入れていた。受験シーズンになると、〈泊り〉も可能で、みなが勉強する環境で独り勉強できた。夜食も自分たちで作るようになっていた。

塾長の恩師と門下生の講師たちのミーティングにたまたま居合わせた時のことは十代の心に何かをのこした。

門下生の一人がある子の〈不出来〉をこぼした。話し始めてしばらくしたとき、「子どもがうまく伸びないとしたら、僕は自分に問う、なぜそうなのか、自分の問題ではないかと考える」。恩師が厳然と語った。

よい大人に出会うことは、その時はあまり気づいていなくても、〈自分を教える〉大事な機会になる。

中井久夫先生の本の中に、（「餌づけ」ならぬ）「人づけ」という言葉がでてくる。

「人間の中にはそれほど有害でなく強引でもなく、限度内であなたの役に立とうとしている者がある、ということ、強制性をなしに伝達しえること」。

これは患者さんに対してだけど、一般の社会生活でもいえる。特に思春期の若者にむけて。大人にもいろいろいる、とわかるのは、社会的知性の一つかもしれない。

信じられる大人がいるというこは、教えられることも増えて、少し生きやすくなるのではないか。もちろん大人どうしでも同じ。

仕事で出会った人から昨日電話をもらった。プライベートでラッキーなことがあって、報告してくれた。一緒によろこんだ。恩師から、中井先生の本から教えたことが実践できている一例かもしれない。